

科技高 いきもの記

Vol.29 2021.6.15

佐藤龍平

ファーブルも研究した狩りバチ ツチスガリ



巣穴



小型の昆虫を抱えている

猿江公園で何気なく地面を見て歩いていると、直径5mmほどの小さな穴から急に1cmほどの虫がひょこっと出てきて飛んでいくのを見つけた。なんだありゃ?!と思って穴をのぞいてみると、かなり奥深くまで続いているようで、懐中電灯で照らしても奥が全く見えない。出て行ったのであれば戻ってくるかもしれないと思って、その場でしゃがみこんで待機していると、案の定、10分ほど経って穴の主が帰ってきた。狩りバチの仲間、「ツチスガリ」だ!。その後もよく観察していると、巣に戻ってくる時に何かを抱えているのが見える。写真を撮って確認すると、抱えていたのはゾウムシやハムシの仲間、まさにいま狩ってきた獲物であることが分かった。

ツチスガリは、かの有名な「ファーブル昆虫記」でも、ファーブルが熱心に研究した虫として第1巻から登場する。「スガリ」というのはハチの古名であり、「ツチスガリ (digger wasp)」は土に穴を掘って巣を作るハチという意味だ。ハチの巣というと、ミツバチのようなハニカム構造 (honeycomb) を想像するかもしれないが、この仲間は**地面に坑道を掘る**。一つの入り口からいくつも枝分かれした部屋を作り、そこに狩ってきた獲物をしまいこみ、卵を産み付ける。まるでアリの巣のようだ (アリとハチは系統的にかなり近い仲間である)。

そんな狩りバチにはすごい能力がある。**捕らえた獲物を針で刺して「麻酔」してしまうのだ**。獲物をすぐに殺してしまえば餌としての鮮度が落ちる。一方で、動き回るぐらい元気だとまだ弱々しいわが子は潰されてしまうかもしれない。そこで、ツチスガリは獲物の動きだけを封じる能力を手に入れたのだ。そんな巧みな狩りの技をもつ狩りバチは、私にとって、小さい頃からの憧れの存在だった。

ところで、狩りに出たツチスガリはどうやって自分の巣に戻るのだろうか。ツチスガリの仲間は集団で同じ場所で営巣するので、そこかしこに穴がゴボゴボあいているのだ。なぜ間違えないのだろうか。観察していて面白いことに気づいた。ツチスガリは巣から出た際、すぐに飛び去らずに一度巣の方を振り返りその場でホバリングしていたのだ。どうも巣穴付近の景色を覚えているようなのである。こんな小さなハチにも、**空間を認識し、記憶する力があるのなら驚きだ**。

また、ツチスガリは**種類によって狩る獲物が異なっている**。例えばヒメツチスガリはゾウムシやハムシを、ナミツチスガリはコハナバチという別のハチを狩る。好みがあるのはいいが、いったいどうやってこの広い公園から狙った獲物

を見つけるのだろうか。次は狩りをしている瞬間を観察してみたい。

実は今年入学した1年生に、**ハチが大好きな生徒がいる**。なんでも、家で狩りバチを飼育している強者で、ハチだけでなく生き物全般の種類や生態に物凄く詳しくて、話を聞いて驚いた。学校周辺の身近な環境にもこんなに魅力的で不思議な狩りバチがいるので、彼にはぜひその生態の解明に取り組んでもらいたいと企んでいる。



巣穴付近に一度着陸し、獲物を抱えたまま頭から穴に入る。地上に降りてから穴の中に消えるまで、ほんの一瞬のできごとだ。



外に出る時はかなり慎重だ。きょろきょろして触角を動かしながら、周囲をしきりに確認して恐る恐る出てくる。この姿はとても可愛い。



巣穴から出ると、一度振り返って巣穴周辺をホバリングする。巣穴の位置を覚えているのだろうか。



新しく巣穴を掘っているところに出くわした (左)。結構硬い地面なのに、大あごを使って器用に土を掘り出していく (右)。